

『悪魔の淫らな甘い罠～媚薬植物でトロけて罠られ～』

著：夏見レイナ

ill：氷夏

いつからそこにいたのか、ベッド脇のソファに黒服姿の男が腰を下ろしている。

漆黒の髪と瞳が印象的な、ひどく美しい面差しに誠は思わず見入ってしまう。

「あんた……、誰だよ」

「私はルキオ」

「ル、ルキ……オ」

聞き覚えのある名だった。誠の脳裡に数時間前の、早朝的一幕が鮮烈に蘇る。

ルキオとはまさに姉が口走った名前だ。

それを父親が鼻で笑った。馬鹿馬鹿しいと言って。

「あの、まさかとは思うけど……もしかして悪魔……な、なんてね」

引き気味に尋ねると、ルキオはしたたかな笑みを浮かべた。

「よくわかっているじゃないか。まあ私くらい高名な悪魔なら世界中の古文書という古文書に肖像画が描かれているからな。知っていて当然だ」

ルキオは緩やかなウェーブのかかった髪をナルシストよろしく掻き上げた。

「……ってことは美少年キラーってのも……」

「近年の私を語る上での表現だな。実に俗っぽい……気に入らん」

不服そうに口角を歪めたルキオはソファから腰を上げると舞台俳優のように両手を広げて大袈裟なポーズをとった。

「かつては耽美的男色魔、あるいは美しき性魔獣という哲学的な形容が為され悪魔崇拝者からの寵愛を欲しいままにしてきた私だが、この何十年かはゾンビや宇宙人などの空想の化けものが幅をきかせ、悪魔人気は低迷している。なんと腹立たしいことか」

蕩々と語るルキオを、誠はぽかんと眺めた。

悪魔は世界中に災いをもたらす恐ろしい生き物ではなかったか。こうした、どうでもいいことに熱弁をふるう悪魔などいるのだろうか。

もしやこの男はただのコスプレイヤーかもしれない。いや、ならば木立から瞬時にして誠をベッドルームに移動させた事実をどう説明すればいいのか。

誠はふいと閃いた。

おそらく奇術だ。ルキオはイリュージョニストに違いない。

何故この離島にいて誠に芸を披露したかは謎だが、姉の口走った名と偶然同じだったせいで悪魔だと信じてしまうところだった。

「もういいよ、おじさん」

誠はベッドから飛び出ると縫れたシャツの裾を直した。

「お、おじさん？」

「あんた30代前半くらいだろ。だったらおれとはダブルスコアだ。充分おっさんだよ」

「よ、よくも、この私にそのような暴言を。いいか、私は魔界王家の王子であるぞ。神すらも……」

「だから、悪魔ごっこはもういいって」

誠は呆れ気味に首を巡らせ、ドアを探した。

「その一言、許さぬ」

「帰りたいんだけどさ、ドアはどこかな」

「そんなものはない！」

抑えようもない怒りにルキオの顔が悪魔のそれに変わった。

みるみる吊り上がる双眸、赤く光る虹彩、頬からこめかみに走る青筋、裂けた口の間からはぬゅつと伸びた牙が光る。

「か、顔が、顔が……」

ルキオの変貌に誠は全身を硬直させた。

「悪魔を愚弄するとどうなるか、その身を持って知るがいい」

ルキオは顎をしゃくった。すると誠の体はひとりで浮き上がり、ベッドへ引き戻されてしまう。

「うわっ！マジかよっ」

「殺しはしない……。なにせ私の好みのタイプだからな。じっくりたっぷりと辱めを与えてやる」

ルキオは両脇の植木鉢に意味深な目配せをした。その途端鉢に植えられた多肉植物がうねうねと動き出し、いくつもの花卉が大きく開き始めたのである。

「なっ……」

その花卉の中心から触手が凄まじい勢いで伸び出し、誠の手足に絡み付いた。

「うわっ！」

触手は生き物のようにならなうねって誠の体を仰向けにし、四肢を広げた形でベッドに縫い止める。

「なんなんだよ、これは！」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>